

2022 年 12 月 23 日

各 位

仙台市青葉区一番町二丁目 1 番 1 号
株式会社 仙 台 銀 行

仙台銀行ホール イズミティ 2 1 コンサートシリーズへの協賛について
～イズミノオト 第 8 回 リヒャルト・シュトラウス 変容ノ前夜～

株式会社仙台銀行（本店 仙台市 頭取 鈴木 隆）は、仙台銀行ホール イズミティ 2 1
企画制作により下記の通り開催されるコンサートへ協賛しますのでお知らせいたします。

当行は、今後も仙台市と連携を図りながら、地域の皆さまの文化活動への支援を通じて、
地域活性化に貢献してまいります。

記

1. 開催日時

2023 年 3 月 5 日（日） （開演）15：00 （開場）14：30

2. 会場

日立システムズホール仙台 シアターホール

※仙台銀行ホールイズミティ 2 1 施設の大規模改修に伴う休館のため、会場を移して開
催いたします。

3. 入場料

全席指定 3,000 円（市民文化事業団友の会料金 2,700 円）・未就学児入場不可

2023 年 1 月 10 日（火）一般発売

4. 各種お問い合わせ先

（1）チケットについて

仙台市市民文化事業団 総務課 TEL：022-727-1875（平日 9：30～17：00）

（2）公演について

仙台銀行ホール イズミティ 2 1 臨時事務所

TEL：022-375-3101（9：30～17：00 休所日除く）

以 上

問い合わせ先

経営企画課 中島・栗村 電話：022-225-8258



じもと

HOLDINGS



交響詩からオペラへ、
70年を超える創作活動

文・山田治生（音楽評論家）



青年期のシュトラウス

Richard
Georg
Strauss

リヒャルト・シュトラウスは、80歳を超えても「メタモルフォーゼ」や「4つの最後の歌」などの傑作を書き続けていたことで知られているが、彼は、早熟の作曲家でもあった。1864年、ミュンヘン生まれ。彼の父親、フランツ・シュトラウスは、ミュンヘン宮廷歌劇場管弦楽団の首席ホルン奏者として、ワーグナーの「トリスタンとイゾルデ」と「ニルベルクのマイスター・ジンガー」の世界初演を吹くだけでなく、パイロイトでのパルジファルの世界初演にも招かれるほどの名手であった。しかし彼自身はアンチ・ワグネリアンであり、モーツァルトなどの古典派音楽を好んだ。一方、母親のヨゼファは、ミュンヘンの屈指のビール醸造業者プショール家の娘であった。

リヒャルトは、父親から音楽の手解きを受けた。モーツァルティアンであったフランツは、新しい音楽には目もくれず、厳格に古典音楽のみを教えようとした。リヒャルトは、幼い頃からピアノとヴァイオリンを習い、よく父のホルンのピアノ伴奏をしたという。作曲は、11歳から宮廷楽長のフリードリヒ・ヴィルヘルム・マイヤーに学んだ。1876年に、「祝典行進曲」を作曲し、それは1881年に作品1として出版された。1880年には早くも、「弦楽四重奏曲イ長調」と「交響曲ニ短調」を作曲。1881年5月には、「交響曲ニ短調」がヘルマン・レヴィ指揮ミュンヘン宮廷歌劇場管弦楽団によって初演された。シュトラウスはまだ16歳の若きであった。5つの小品は1881年に作曲され、作品3の番号を付された。

1882年にギムナジウムを卒業したシュトラウスは、ミュンヘン大学哲学科に入る（しかし、音楽活動のため翌年には大学をやめてしまう）。13管楽器のための「セレナード」は、1882年に作曲され、同年11月、ドレスデンで、フランツ・ヴェルナーが指揮する同地の宮廷管弦楽団のメンバーによって初演された。その後、ハンス・フォン・ビューローがこの「セレナード」に注目し、1883年12月にマイニンゲン宮廷管弦楽団で取り上げた。このときはクラリネットにブラームスと親交のあるリヒャルト・ミュールフェルトやホルンにホルン協奏曲第1番の完全な形で初演を吹くことになるグスタフ・ラインホスも参加している。そしてビューローは、1884年のマイニンゲン宮廷管弦楽団のベルリンツアーの際にも「セレナード」を持って行った。「セレナード」をきっかけに、ビューローによって認められたシュトラウスは、1885年にマイニンゲンの宮廷管弦楽団でビューローのアシスタントを務めるようになり、指揮者としての活動を始める。

作曲家としてのキャリアの初期には「チェロ・ソナタ」や「ピアノ四重奏曲」などの室内楽作品の作曲にも取り組んだ。「ヴァイオリン・ソナタ」は初期の室内楽曲創作の最後を締め括る名作。1888年、作曲者24歳のときに書かれたが、後の彼の作品を彷彿とさせ、その早熟ぶりに驚かされる。

1889年には出世作というべき交響詩「ドン・ファン」が初演され、成功を収める。その後「死と変容」（1890）、「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」（1895）、「ツアラトゥストラはかく語りき」（1896）、「ドン・キホーテ」（1897）などの交響詩を立て続けに発表。交響詩の作曲家としての名声を獲得した。

その間、オペラは「グントラム」があるのみで、そのオペラは成功を取めたとはいいがたかったが、シュトラウスは1894年の「グントラム」の初演をきっかけにヒロイン役を歌ったパウリーネと結婚することができた。パウリーネは、バイエルンの将軍、アドルフ・デア・アーナの娘であり、出会った頃は新鋭の歌手だった。シュトラウスとの結婚後、彼女は次第に主婦業に専念することになる。気性が激しく、気が強かったことで知られ、シュトラウスの「英雄の生涯」「家庭交響曲」「インテルメッツォ」などの作品に彼女の姿が素材として使われている。

1894年、シュトラウスは、14世紀のドイツに実在したという伝説的ないたずら者であるティル・オイレンシュピーゲルを主人公としたオペラを作曲する構想を持っていたが、最初のオペラ「グントラム」を初演したものの成功を収めることができず、オペラ化を諦め、それを新たに交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」として創作した。「ドン・キホーテ」を書いた頃、シュトラウスは故郷ミュンヘンの宮廷歌劇場の指揮者を務めていた。1898年3月にケルンで「ドン・キホーテ」の初演があった後、同年11月にベルリンの宮廷歌劇場の楽長となる。そして1899年3月にフランクフルトで交響詩の集大成として書いた自伝的な英雄の生

1864年6月11日

ミュンヘンで生まれる。

1881年

交響曲ニ短調が初演される

1882年

ミュンヘン大学哲学科に入学（しかし、翌年には大学を辞める）。

1885年

マイニンゲンの歌劇場で指揮者としてのキャリアを始める。

1888年

ヴァイオリン・ソナタが初演される。

1889年

ワイマール宮廷劇場の楽長に就任。「ドン・ファン」が初演される。

1894年

最初のオペラ「グントラム」がワイマールで初演される。パウリーネと結婚。

1896年

「ツアラトゥストラはかく語りき」が初演される

1898年

ベルリン宮廷歌劇場の楽長となる。

1899年

「英雄の生涯」が初演される。

1905年

「サロメ」が初演される。

1909年

「エレクトラ」が初演される。

1911年

「ばらの騎士」が初演される。

1919年

シャルクトともにウィーン国立歌劇場の音楽監督となる。「影のない女」が初演される。

1933年

ドイツ帝国音楽局総裁に就任。

1942年

最後のオペラ、「カプリッチョ」が初演される。

1946年

「メタモルフォーゼン」が初演される。

1948年

「4つの最後の歌」を作曲。

1949年9月8日

ドイツのガルミッシュで死去。

涯」を自らの指揮で初演する。「英雄の生涯」によって交響詩を卒業したシュトラウスは、創作の中心にオペラを置くようになる。ただし、オペラの時代においても「家庭交響曲」（1904）や「アルプス交響曲」（1915）を書いている。

指揮者としてのシュトラウスは、マイニンゲン、ミュンヘン、ワイマール、ドレスデンなどの歌劇場で経験を積み、ベルリン宮廷歌劇場の楽長やウィーン国立歌劇場の音楽監督を歴任した。そして、ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団などのオーケストラも指揮していた。

1905年、3作目のオペラ、オスカール・ワイルドの戯曲を原作とする「サロメ」がドレスデン宮廷歌劇場で初演され、サロメの「7つのワエルの踊り」やヨカナンの首切りなどでセンセーションを巻き起こす。1905年の「サロメ」と1909年のギリシャ悲劇を原作とした「エレクトラ」の成功により、ワーグナーの後継者と目されるようになったが、「サロメ」や「エレクトラ」のような凶暴で前衛的な音楽がどこに行き着くかは聴衆にとっても不安であった。しかし、シュトラウスは、次の「ばらの騎士」でモーツァルトを彷彿とさせる優美さと20世紀初頭にふさわしいロマンティックでゴージャスな音楽に大きく舵を切ることになる。

「ばらの騎士」は、若い貴族オクタヴィアンと不倫関係にあった元帥夫人が、ゾフィーという若い娘の出現により、オクタヴィアンから身を引くというストーリー。1911年1月、ドレスデン宮廷歌劇場での「ばらの騎士」の初演は、大きな成功を収めた。このオペラの銀のばらの献呈場面、オックスのワルツ、最後の元帥夫人、オクタヴィアン、ゾフィーの三重唱などが人気を博し、その年だけで50回以上の再演があり、この作品を観るためにベルリンからドレスデン行きの特別列車が運行されるほどの大ヒットとなった。

1916年には、新古典主義的な小編成のオーケストラを用いたオペラ「ナクソス島のアリアドネ」を発表。その後も、「影のない女」（1919）、「インテルメッツォ」（1924）、「エジプトのヘレナ」（1928）、「アラベラ」（1933）、「無口な女」（1935）、「平和の一日」（1938）、「ダフネ」（1938）、「ダナエの愛」（初演は作曲者死後の1952年）などのオペラを創作していく。つまり、シュトラウスは、作曲家としてのキャリアの前半を交響詩に、後半をオペラにあてたのであった。

1933年には、ドイツを代表する作曲家として、帝国音楽院総裁に任命された。しかし、1935年に、「無口な女」の上演をめぐる、台本作家ユダヤ人であるシュテファン・ツヴァイクとの協力をめぐるナチス政権とのトラブルが原因で、帝国音楽院総裁を辞してしまう。

最後のオペラは「カプリッチョ」（1942）。台本は高名な指揮者クレメンス・クラウスと作曲者自身が手掛けた。1770年代のパリ近郊の貴族の邸宅を舞台に、「言葉が先か、音楽が先か」がテーマとなっている。弦楽六重奏曲のために書かれた前奏曲は、しばしば単独で、室内楽コンサートなどで演奏される。

80歳を超えてからは、「メタモルフォーゼン」、「オーボエ協奏曲」、「クラリネットとファゴットのための小協奏曲」、「4つの最後の歌」などで最晩年の境地をひらく。

「メタモルフォーゼン」は、1945年に第二次世界大戦によって破壊された故郷ミュンヘンやドイツへの悲しみをこめて作曲された。23の独奏弦楽器、ヴァイオリン10、ヴィオラ、チェロ5、コントラバス3のために書かれたこの作品は、最後の部分に「追悼」と記され、ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」の第2楽章「葬送行進曲」のテーマが引用される。ある意味、祖国へのレクイエムである。

「4つの最後の歌」は、シュトラウスの絶筆といえる作品である。「4つの最後の歌」の最初の3曲は、ヘルマン・ヘッセの詩に音楽が付けられ、第4曲「夕映え」のみヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフの詩によるもので、繊細かつ多彩な管弦楽法が魅力的である。この4曲は1948年に作曲されたが、翌1949年9月8日、シュトラウスはこれらの初演を聴くことなく、ドイツのガルミッシュで亡くなってしまふ。「4つの最後の歌」の初演は1950年5月22日、ロンドンで、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの指揮、キルステン・フラグスターートの独唱によって行われた。



晩年のシュトラウス（画：マックス・リーパーマン）



パウリーネ・シュトラウス・デア・アーナ